

自 省 の 弁

埴原和郎（人類学教室）

学部，大学院の在学期間を加えると，私は23年余にわたって東大理学部のお世話になりました。いま，やっと東大を卒業できるというのが実感です。

私が人類学の研究をしようと思ったのは中学2年生の時，つまり14歳の少年の時代でした。こういって，ずいぶんませた子供だったように思われ

るかも知れませんが，自分が人間であるからには，自分自身を知りたいという単純な動機だったに過ぎません。

しかし結果として少年時代の夢がかない，今まででなんとか人類学の研究者として過ごせたことは，まことに幸福であったと言わねばなりません。いうまでもなく，これは教えを受けた多くの先生方

や、先輩、同僚、後輩の方々のお蔭ですが、そのご好意に十分報いることもなく、東大の定年を迎えてしまったことを自ら恥入る次第です。

私は札幌医科大学と東大理学部勤務しましたが、その間、大学の教授とはどうあるべきかというのを、私なりに考えてきました。そして大学教授は、次の四つのランクに分けられるという結論に達しました。

第1級教授：国際的に最先端の研究を自ら進めると同時に、優秀な後継者を育てる人。

第2級教授：研究は人並だが、指導能力の高い人。

第3級教授：研究は第1級であっても、指導の下手な人。

第4級教授：研究も指導能力も標準以下の人。

以上のランク付けに対して異論もあるでしょう。とくに問題となるのは第2、3級の順位かと思われます。

大学の教官にとって研究が重要であることは言うまでもありません。しかし教官はこのほかに、学生や後継者を指導・育成するという義務を負っています。従って指導能力の低い人は、優秀な研究者であっても、大学の教授として必ずしも適格とは言えません。これは、例えば優秀な演奏家が、必ずしも優秀な演奏の指導者とは限らないのと同じです。第2級はこのような意味で、相当高く評価できるのではないのでしょうか。

第3級も研究者として貴重な存在ではありますが、大学教官適格者とは言い難く、むしろ研究所向きの人と言うべきでしょう。

第4級はお話にもならず、大学からの追放適格者です。けれども現実には、第4級の教授が意外に多いらしいのです。

数年前、私の知人で衆議院の文教委員を勤めている議員が、話を聞きたいと言って来ました。その時は個人的に大学に関する話をしたのですが、彼の話によると、文教委員会では全国の大学教授の研究実績を抽出調査した結果、1/3余りの教授が過去10年間に1篇の論文も発表していないというのです。彼が「先生、こんな事実があるということ信じられますか」と言うので、私は「信じ難いことですね」と答えましたが、実は私自身、そのような教授を数人知っています。

もちろん、論文の数は専門によって違うでしょうし、数だけで批判することも出来ません。しかし、地方新聞の小さなコラムに寄せた随筆まで「論文」として堂々と論文リストにのせる例が多いことも事実です。また、自分では何もしないのに、教授であるが故に共著者として名を連ねていることも少なくありません。

この点で、わが理学部は神経質にも見えるほど純粹であり、この理学部に属したことを私は誇りに思います。しかし冷静に反省すると、私はどうやら第4級教授で、定年といえば格好は良いのですが、実状は追放といったところかと苦笑しているところ です。

何はともあれ、私の少年時代からの夢を実現させて頂き、そのうえ、本当は追放すべきだったかも知れない私を長年にわたってお世話下さった理学部の皆様に、心からお礼を申し上げます。今後も命ある限り、この理学部の伝統を忘れないよう心掛けるつもりです。本当に有難うございました。